
なのは一途のはずがどうしてこうなった？

葛根

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのは一途のはずがどうしてこうなった？

【Zコード】

Z7866Z

【作者名】

葛根

【あらすじ】

高町なのは一筋の主人公だが、何故か共有物扱いに追い込まれる。

本命の高町なのはを筆頭にどこかおかしいヒロインたちが紡ぎだす
物語

プロローグ（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

プロローグ

高町なのは達との初めての出会いは約10年前だ。
管理局の訓練学校で同じ年。

それだけの理由で話しかけられた。

当時の年齢でランクAAAクラスの魔導師は珍しく、高町なのは達は異常であった。

されど、ミウラ・ケイタもまた、異常な人物である。

ミウラ・ケイタは管理外世界の住人であった。

だが、高町なのは達の話を聞けば聞くほど、似た世界で生まれ、育つた。

第97管理外世界「地球」が高町なのはの出身である。

一方、第48管理外世界「アース」がミウラ・ケイタの出身だ。文化レベル。魔法の有無を含めて極めて似た世界であった。

それらを話の種に互いが語り合い、仲良くなつたのは当時の年齢からも男女の区別の意識が低くまた、同年であることから、友人となるまでに時間は掛からなかつた。

そして、極めつけはミウラ・ケイタの保有する魔力量であった。
ランクこそ彼女達に劣るもの、魔力量は彼女達の総合魔力量を超えていたのだ。

さらに、レアスキル持ちである。

それは、魔力供給だ。

ミウラ・ケイタは高町なのは達の同期に比べ、出動回数が異常に多かつた。

その理由として魔力供給と魔力量の組み合わせからなる補助の役目を担うという役割を持っていたからである。

つまりは、補給物資扱いだ。

だからこそ、本来のランクとは関係なしに、危険度の高い任務や、災害救助などの事件を多く経験することになり、それがミウラ・ケイタの戦術、戦略眼を育み、成長させ、開花させる要因となつたのだ。

奇しくも10年間と言う歳月の殆どを現場から学び、生き延び、時には役に立ち、戦い続けた事で彼の経験値は膨大なモノになつた。そして、現場での役割を一旦終え、というか、ギブアップして。ある年から教官を目指す。それは、管理局員の若手育成を目的とした戦技教導官であり、戦術講師であり、現場において生き延びる術を教える立場になろうといつものであった。

何故、教官なのか。

それは、安全だから。そして、楽して仕事をしたかったからだ。そんな半端な思いで受けた戦技教導官試験は見事に落ちて、同期の高町なのはは一発で合格した。

結局、高町なのはに遅れること3ヶ月後、一度目の試験で合格を掴みとる。

彼女は忙しい中、ミウラ・ケイタの試験対策に時間を割き合格時にはきちんとお祝いをしてくれたのだ。

その時からだろうか。

彼が彼女を意識し始めて、彼女が彼を意識し始めたのは。

互いに奥手であり、忙しくなつた為会つ時間が減つた。

そんな中でも月に一度は一人で食事に行つたり、洋服を買いにいつたりと青春らしい青春を送り、ついに男のほうが告白をしたのだ。初めてのキスは18の時であった。

互いが意識し始めて3年の月日が経つた頃の話である。

しかし、相手はエースオブエースの称号を持つ管理局の人気者だ。

交際は秘匿するものであると男は説得する。

それに、渋々了解をした彼女は怒りもしたが、自分の為という事も理解していた。

互いに男女として認め合い、相思相愛の関係だ。自然と肉体的な欲求が湧き上がり、そういう行為をしようとした日で決めた。

いや、行為をしようといつも高町なのはの部屋で求め合ったのだが、どこからかその情報がリークされており、秘匿されていたはずの交際がフェイト・テスター・ラオウン、ハラオウン、八神はやて一同の寝室突入という形でバレてしまったのだ。

「申し開きは？」

言及するのは高町なのはの親友であるフェイト・テスター・ラオウンである。

彼女は表面上は怒つていよいよ見えるのだが、長い付き合いのミウラ・ケイタにはその内情が手に取るように理解できた。それは、つまり怒っている。

「えー、秘密にしていたことは申し訳ない。だけど、真剣交際！
そう！ 真面目にお付き合いをしています」

「機動六課立ち上げ前にスキヤンダルは困るわ～」

苦笑いの八神はやてもやはり、表面上はいつも通りだが、怒つていた。

「フェイトちゃん、はやてちゃん。秘密にしていたのはごめんだけ
ど、ケイタが言う通り、清いお付き合いを！」

「嘘！ だって、その、しようと/orしてたじゃない！」

顔を赤らめ叫んだのはフェイトだった。

「その、なんだ。まだ未挿入だったから良いじゃないか。テスタロツサ」

シグナムは味方らしい。

「どうだかな。隠れて付き合つてたんだ。一回位してんじゃねーの？」

幼女体型の赤い格好のヴィーラが容姿に似合わない発言をする。

「でもでも、ゴムも準備してましたし、日付的にも安全日ですよ」

医学的見地から意見するのはシャマル先生だ。彼女はどこかずれている気がする。

「……」

俺以外の唯一のオス。ザファイーラは沈黙を守つたままである。

「と・に・か・く！ そういう行為はお預けや！」

激を飛ばすはやてにヴォルケンリッターは頷く。

夢にまで見た初体験はタヌキ同盟に阻止されてしまった。

後日解つたことはなのはのスケジュールと俺のスケジュールをハックして閲覧したのはリインフォースだったということだ。

子供を過ぎ大人の階段を上がる。

友人はそれを阻止し足を引っ張る。

配点：（謀略）

なのはの意見が多かつたので勢いで書いてみた。

基本的にギャグ方向に走る。

シリアル？ 何それ美味しいの？

更新は不定期。続くかはしらん。

プロローグ（後書き）

誤字修正

第一章 謀略と方向性（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第一章 謀略と方向性

男女の仲を意識した上で肉体関係を結ぶはずが失敗に終わった。
互いに若く、欲求に素直であった。

一度の邪魔でめげるような精神を持ち合わせていない。

不屈の精神の持ち主である高町なのはは再度の密会を求めたのだ。

『今度私達が会つときにはちゃんとじょうづね』

フェイト・テスター・ラッサ・ハラオウンは長年の友人に疑惑を持つ。
好きな人ができたらお互いに教えあおづ。

それを破つたのは他ならぬ高町なのはであった。

その約束はまだ互いが幼い頃にしたもので時効があるのなら既に時
効を迎えていると思う。

それに、私も約束を破つていた。

高町なのはの恋人であるミウラ・ケイタが好きなのだ。
それも、出会つてから直ぐの事だった。

私と同じで両親があらず天涯孤独の男の子。

明るくて優しくて初めての異性の友だちだ。

執務官試験に落ちた時は一緒に悲しんでくれた。
過去問題や傾向と対策を彼が集めてくれた。

それでも、試験には一度落ちた。

二度目の時は慰めてくれた。

『諦めたら終わりだ。だからさ。落ち込んで、一番下まで落ち込ん

だらあとは上がつてくるだけだよ。それに、頑張つてゐるフエイトの事、尊敬してゐるんだぜ?』

三度目の試験で合格した。嬉しくて嬉しくて、泣いた。

『すげーゼ! よつし。祝いだ! ケーキパーティーだ』

義母のリングディ・ハラオウンと義兄のクロノ・ハラオウンとなのは達を集めてくれて、お祝いパーティーをした。

その時、私は彼を好きだと感じた。

本当の家族がいない彼は祝う事があつても祝われる事がない。

私が家族になつてあげると。

言いたかった。

それが好きの始まりだった。

だが、今の今まで好きと言えなかつた事に後悔をした。

「だつて、恥ずかしい」

自分から告白するのは。

だから待つた。それがいけなかつたのだ。

ならば、

「振り向かせる。それとも、う、奪う?...」

妄想だ。落ち着こう。

恋愛経験のない自分ではわからない。だから聞こいつ。

「バルディッシュ。どうすればいいと思つ?..」

『既成事実を作つてしまえば男といつもの責任を取ると判断できます』

長年付き添つたインテリジョン・デバイスの判断だ。
恥ずかしいけど、それが正しいはず。

「それは、つ、つまり。え、えっちな事をなのはより先にするって事?」

『イエス、マスター』

フェイト・テスター・ハラオウンの間違いは、機械であるデバイスに解答を求めた事でありそのデバイスもまた効率を求める機械であった。

つまり、効率的に相手を倒す事を示すデバイスは、

『ユー、やつちやいなよ。特に大切なのは避妊具を使わないことだぜ。マスター?』

妊娠という最大の結果を周りに理解させることができマスターの求める女の勝利だと導いたのだ。

八神はやはては己が従えるヴォルケンリッターを招集していた。

『会議や!』

激を飛ばす。

「出遅れたで! まさかなのさちやんが!! ウカツとおむき合っこをしているなんて恥やで! なあ?」

ハ神はやての予定は崩れた。

本来なら機動六課にミウラを入れて上司権限であんなコトやそんなコトをしようと策略を練つっていたのだが思わぬ失態をした。

「しかし、主よ。あの二人が本気で付き合つているのなら身を引くべきでは？」

烈火の将、シグナムが正論を言つ。

「アホか！ シグナムがミウラっちでオナつてんの知つてんねんで？！」

「な、何故ソレを！」

烈火の将は顔を烈火のごとく赤くした。

それはプライベート侵害！

「リインは何でも知つてますですー」

よおし潰そう。プチッと潰そう。管理人格だろうが、プライベートは守られるものでなければいけないはずだ。

「ちなみにシャマルが一番回数が多くて次にシグナムで最後にヴィータちゃんですー。この淫乱豚どもですー！」

自分と同じ境遇の人物がいて安堵する。
よかつた自分だけじゃない。

こんなに嬉しいのは久しぶりで涙ができる。

「そーゆーわけで、皆ミウラっち好きなのは知つてんねん。だから、手に入れるのは当たり前やろ？」

「はやてちゃん。何がいい手があるの？」

シャマルが顔が赤いまま聞いた。

ヴィータは俯いている。ダメージが大きかつたようだ。

「最終手段や。既成事実を作る！ やつてしまえば」いつかのもんや

「主はやてよ。そ、それはつまり、どうゆう事ですか？」

聞く。

まだ主と呼ぶ辺り私は忠実な騎士だな。

「アレだ。はやての隠してる本にあつた逆レイプってやつだら？」

ヴィータ！

「どこのそんなん風に染まつてしまつたのだ？！」

「ぐつ。私の秘蔵の本を……。まあええ。不問や。実際、ヴィータの詰つとおりミカラつちを襲つんや」

「はやてちゃん、それって犯罪じや？」

シャマルが不安に思つてゐる事を告げた。

「大丈夫です。女性から男性への強姦被害は通報される方が少ないです。もし通報されても、もみ消す準備は万全です」

「そういうことや。機動六課設立とミカラつちを逆レイプするという任務。大変だとおもつけど。頑張つてやー。」

「はーー。」

女達の声が重なる。

置物となつていたザフライーラセミカラの身を案じ静かに思った。

もげる、と。

決心と覚悟

己の運命が知らず決まる

配点：（被害者）

原作崩壊がこれほど楽しいとは。
キャラがおかしくなつてゐる。

だけど後悔はしていない。

今後も崩壊キャラがでますので、
原作を大切に思う人はここらで読
むのをやめてください。

注意はしました。

第二章 人事異動と恋人（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第一章 人事異動と恋人

若干19歳でありながら歴戦の英雄達と出動回数が並びつつある人物がいる。

伝説の三提督の一人は言う。

『私の若い頃でもあんなに使い回される奴はおらんかったよ』

さらにもう一人は、

『確かに。しかし、本人も満更ではなさそうだった。実に勤労者だ。若い子はアイツを見習え』

最後の一人は、

『そろそろ我等に戦歴が並ぶんじゃね？ 威儀が弱くなりそうだから人事で教官にしよーぜ。アイツ、戦術と戦略眼は我等に並ぶ勢いだもん。若い奴に負けたくないんだからねつ』

つまり、本人の望みと上層部の望みが一致したのだ。

人事異動通達。

お前、生意気にも戦歴がすごいから教官にしてやんよ。
エースオブエースと同じ教導官な。あれ？ 資格もってんの？ おい！ 人事なにやつてんの？ まあいいや、人事異動命令ね。

エースオブエースと協力して精銳を育ててね。ここにマジな。
あと、エースオブエースはマジ怒ると厄介だから怒らすなよ？ 絶対だぞ！

追記

機動六課頑張つてね。

三提督一同より。

え？ これ、マジ？

人事部に緊急で呼ばれて来てみれば伝説の三提督から勅命で人事通達が届いていると人事の女の子が慌てて、でも内容みて俺が吹いた。

「ミウラさん。伝説の三提督からの人事通達なんて前代未聞ですよ？」

人事の女の子は俺と同じ年位である。あの伝説の三提督からまさかの指令だ。

一般的な管理局員には雲の上の存在だ。

「そうらしいね。俺、教導官だつて。前々から申告してたのが通つたと思って死力を尽くします」

敬礼。

人事の女の子は慌てて返礼。

「あの、サイン下さい。ファンなんです。最新刊買いました」

そう言って最新刊である『訓練生の苦難』を胸の前に出した。ささつとサインを書いて

「購入どうも。今後も難シリーズをよろしくね
「はい。ありがとうございます」

立ち去った。管理局員でサインをしたのは何人目だろうねえ。
数えきれない。

自分の体験した訓練学校時代をファイクションにして物語を作つて某出版社に出したら佳作扱いで受賞して、そつから難シリーズが意外に人気がでたな。

趣味で書いた物語で思わぬ副収入を得ているので金はある。
だが、暇がない。だから現場から教える側に移動したかった。
今回の人事は渡りに船だ。

特になのはと一緒に仕事ができるのが嬉しい。

人事で良かつたと思える口だ。大ファンである作家が目の前にいた
からだ。

訓練生の困難、訓練生の至難、訓練生の苦難と続く難シリーズと一
般的には呼ばれている書籍だ。

さらに、射撃の心得、体術の心得、空戦の心得、陸戦の心得と続く
心得シリーズの著者もある。

どちらも管理局員を中心に入気が出て一般書店にも並ぶ様になつた
書籍だ。

作者のミウラ・ケイタさんに会えた。サインを貰つた。

写真が取れればよかつたんだけどさすがに仕事中なので自重した。
顔は悪くない、むしろ良い方だと思う。
思つた通りの人柄で良かつた。

後で皆に自慢しよう。

「うつす！」

「アレ？ ケイタじやないか。 無限書庫に何か用？」

ユーノ・スクライアだ。

彼は管理局の七不思議の一つ。 といふか疑惑がある。
実は女の子なんじやないの？
だがそれは確認済みである。

「なに、お前の顔を見に来た」

「ふーん」

薄い反応である。

理由は明白で、彼が男である証明に股間を握った時から親友から友人へ降格したのだ。

それに、同人活動でユーノ・スクライアが犯されまくる物を同人即売会で発売した事がバレた辺りでかなり怒られた。
でも、その年の一番の売上だった。

「まだ怒ってる？」

「そりやね。僕がB-Lの主人公で性欲を排除する糧になつてるんて知らなかつたからね！」

半年も怒つてゐるんてケツの穴の小さいやつだ。

まあ、そのケツも今では一部に狙われているとかで申し訳ないと思
う。

「謝つたろ？ それにエロティカ上げたじゃん。何？ 今度は合コンか女の子紹介すればいいの？」

「そういう問題じゃないよ！ 僕を女装させたコラとか完成度高すぎだよ！ 未だに後輩に『ユーノさんって女の子なんですか』って聞かれる気持ちが君にわかる？ わからないだろ？ 次やつたら絶交だからね？」

うむ。

「マジすまん。でもお前の顔だつたら勘違いする。もつと男らしい格好すれば？」

「はいはい。じゃあね。仕事だから。君も仕事あるんだろ？ こんな所で油売つてないでさつさと戻れよ」

今日も許してくれなかつたか。今後は自重しよう。ユーノを怒らせると怒り期間が長いからな。

偶然。たまにあることだが管理局内でのはとばつたり会つた。

「帰り？」

「うん」

なら一緒に帰るつとなるのは恋人同士なら当たり前の事だ。

「人事で今度からなのはと一緒に職場になるよ」

「ほんと？」 そつかあ。やつと人事通つたの？」

以前から一緒に働くために入事に申請を出していたことを思い出し

たよつに聞いてきた。

「まあ、そんな感じ。で、今日この後どうする？」

それは肉体関係を結ぶかどうかの問い合わせである。

「ホテルにしよ。やっぱ部屋だとフロイドちやんとかまた邪魔して来そうだしね」

「わ、わかった」

気迫のこもった表情だ。それに若干赤い顔だ。
きちんと確かめたい。そして繋がり合いたいと思つ。
だからこそ、

「これからもよろしく

「うんー。」

お願いした。

期待するのは職場か行為か。

配点：（恋人）

前回注意したので苦情等受け付けません。

あと、時空系列的には機動六課立ち上げ前です。
まあ、あまり気にせずに。

そのうち戦闘とかあるはず。たぶん。

第三章 結びと親友（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第三章 結びと親友

ホテルと言つても様々な種類のホテルがある。

高町なのはが選んだホテルは所謂高級ホテルであった。

レストランで食事をして、そのまま宿泊になる。

表向きは今後の教導官同士での語り合いである。

仕事である以上領収書を切るのだが、その辺りが高町なのはの小狡い所であった。

さらには、昨日高町なのはの友人たちに釘を刺されたのにも関わらず翌日にまさか約束を違えるとは思いもよらなかつただろう。だからこそ、一人きりでホテルに外泊できたのである。

事の始まりは高町なのはからであった。
唇を求め合ひ。

唐突ではあつたが、そういうふた行為をすると約束をしていたので応じた。

お互に管理局から支給された制服であつたが、それはすぐに無くなり互いに生まれたままの姿になつた。

息を呑む。

「綺麗だ」

それが男の感想であつた。

女性の身体という物を初めて直視したのだ。

「明かり消して、恥ずかしい」

薄暗い光の下一つのベッドで重なりあつ。互いに初めてである。

それでも、男の方がリードする。

知識だけは人一倍あると自負する男は女の身体を喜ばせる事にした。完全に受けるだけの女は初めての性感に不安と喜びがあった。

興奮した男の物を薄暗い中初めて直視する。

思った以上に大きい。

そして逞しいと感じる。

だが、愛おしいとも思ひ。

手と口だ。

互いに刺激しあう。

初めて異性に触れられた同士達するのは早かつたと言える。それでも回復は早かつた。

互いに準備は万全で互いの初めてが繋がったのだ。

「痛くない？」

「うん、大丈夫」

涙した。それは嬉しさと痛さが交わったもので悲しいものではなかつた。

二人は実感する。

繋がり合ひの愛おしさと快樂に心まで浸されて満足できるのだ。

朝帰りだ。

高町なのは自分の中に残る痛みと確かに心の温もりを感じて満足気に自室に戻る。

時計の針は5時を示しており、自室で寝ているはずの親友を起しれない様に静かに扉を開いたのだ。

「げ、フェイトちゃん？」

「おかえり。なのは。随分遅い帰りだね」

高町なのはとフェイト・テスター・ラッサ・ハラオウンは10年来の親友である。

その親友の感情が読めない。

無表情を貼り付けにした顔が怖いと思った。

「ち、ちょっとお仕事で、話が長くなつてそのまま外泊しちやつた」「ふーん……。その話し相手って誰？」

正直に答えるべきか誤魔化すべきか迷う。
これ以上嘘を重ねるのは心苦しい。

「えーと、ケイタ君と、仕事の話を……」

「それって二人きりで、しかもお高いホテルで、一緒に部屋で！
泊まつて！ する」となのかな？

激昂だ。

だが、

「でも、結ばれた事をお祝いするのが親友かな？」

泣かれた。

どこで私達の情報を手に入れたか気になるが目の前の人物を落ち着かせないといけない。

情緒不安定だ。

「落ち着いて、フェイトちゃん！」

「私、落ち着いてるよ？ だからね、お願ひ聞いて？」

明らかに落ち着いていない。

だから相手の言い分を聞こう。

「な、何かな？」

「なのはは私達との約束を破つて裏切つた。だから私も裏切つていよいよ？」

何を？ と聞くとしたが、

「今度の休み。ケイタ君貸して？」

無表情のまま告げられた。

「田撃情報と、ホテル側の顧客情報から間違いないですー」

八神はやは報告を聞いて頃垂れた。

まさか約束を翌日に破られて、さらに膜まで破られていふとは。

「さすが、ヒースオブヒースや。名実共に誰よりも先にいきおる。じつから先は戦争や！」

それはつまり、

「手段、場所を選ばず、犯せ」

勝てば良いといつ田的のためには手段を選ばない卑劣な手だ。

「しかし、主はやでよ。私達が先に、その、してしまってもかまわないのか？」

「かまわへん。何故なら、ヴォルケンリッターは私の所有物扱いや。それを理解しているミウラつちは事後、必ず私の元へ来る。すいません。貴女の物に傷を付けてしまいましたと。そこでや！ 私は優しく答える。別にいいんや。男女の仲なんてどうなるかわからへん。でもな、責任をとらないかん。わかるな？ 私の言うこと一つ聞けば許したる、と」

「で？」

興奮した様子の主に問う。

「それでや。ミウラつちは言つことって何と聞く。それは、私を娶ることや。そうすれば万事解決。所有者を妻にすればそれに連なるヴォルケンリッター付きや。愛人3人やで？ お得パックや。これに乗らん男はおらへんやろ？！」

ああ、そうか。主はやはバカだ。

「はやてちゃん自体が攻めに行つたりしないんですか？」

シャマルがバカに問うた。

「は、恥ずかしいやん」

頬を朱に染めて顔を押さえる手は可愛らしいのだが、

「何を今更。はやて。私が一緒にいってやるぜ」

ヴィータもバカだつた。彼に幼女趣味があるかは知らないが、ヴィータは結構可愛がられている。

だからこそ近づきやすいと自負しているのだろう。全く。

私は剣術指南役で明日彼と会うつと/or/いうのに。
忘れているみたいだ。それに言つ必要ないはずだ。
一番槍は私が頂くとしよう。

男女は大人の階段を駆け上がる。

結ばれた絆。刻まれた傷跡。

配点：（契）

セーフなはず。

あと、工口描写に抵抗がある人はすまんね。
読ませておいて謝罪とか作者は阿呆だな。

第三章 結びと親友（後書き）

誤字修正

多いな。
気をつけます。

第四章 烈火の将は実力派（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第四章 烈火の将は実力派

烈火の将と言えば管理局でも名高い近接戦闘の達人である。その彼女は人に物を教えると言つ行為が苦手であり基本的には新人に教えることをしていない。

しかし、模擬戦の訓練を頼まなければ受ける位の気概は持ち合わせている。

シグナムと交流を深めたいと思う下心のある男性局員は初め狂喜した。

だが模擬戦訓練は決闘という名であり、完膚なきまでに相手を叩きのめすシグナムに訓練を願う局員は激減した。

今ではミウラ・ケイタとエリオ・モンティアル位しか訓練という名の決闘を申し込む相手がないのだ。

何故ミウラ・ケイタが剣術指南役としてシグナムに訓練を頼むかと
いうと、それは生き残るためにあつた。
彼は決して強いわけではない。

総合ランクはAランクだ。

保有魔力量が平均値を底上げしているため総合的なランクはAなの
だが、個々で見ると平均Cランク程度である。

それでも数多くの戦歴を持つため戦い方自体は巧いのだ。

後方支援が彼の役割だが、各ランクを高める事に必要性を感じてい
る。

それは彼一人が取り残された状態でも生き延びる術の獲得のためだ。
まずそんな状況は起こりえないが、万が一という事がある。ならば、
不測の事態に対応するためにも様々な技量の確保は必然であつた。
その一つが剣術であり、近接戦闘の技術であつた。

「筋はある。だが、防御ばかりが巧くなつても話にならんぞ」「仕方ないよ。身を守る前提で習つてんだし」

互いに握るのは木刀である。だが、身につけているのはバリアジャケットだ。

これは訓練であり殺し合いでない。
だから、デバイスを使う事はないのだ。
それでも実力差は明らかだ。

「ケイタは見切りがいいが、攻撃がなつてない。身を守るなら敵を倒すのが一番だ」

ピンクのポーテールが揺れる。
横払いの剣筋だ。

「そつ、ここで避けたなら相手に隙があるだろ？ ソコを突け」

言われた通りに突く。
が、返す刀で弾かれる。

「と、まあ、私くらいになると返し技が間に合つてこらなる

喉元に木刀の先が突きつけられた。

「降参だ」

負けを認める。初めから勝つことが目的ではない。

「うむ。だが、落ち込むことはない。負けない戦い方をすればケイタに勝てる相手はなかなかないぞ」

「それでいいや」

こんなもんだろ？。

才能というものがなく、努力の果てに辿りつけた限界値を見定める。シグナムクラスの近接戦闘技能を持つ相手に30分位持つかどうかだ。

「今日は終いだな。ふ、風呂に行くが、い、一緒に……は、入るか？」

「は？」

何を言った？

風呂と一緒に入るだと？

何の策略だ？

時間的に訓練場近くの風呂場は空いているだろ？。

何せ早朝だ。

そうは言つて誰もいないとは限らない。

「うん、そうだな。そだ。一緒に風呂に入る。訓練の疲れを取るにも必要だな」

自分に言い聞かせる様にシグナムは言った。

聞き違ひでもなく、現実に聞いた。

そして、

「いやいやいや！ 僕にはなのはつている彼女がいますからー。」「知つているが？」

当たり前のように答えた。

あれ？ 間違つてるのは俺の方なのか？

それほどハッキリした言葉だ。

「細かい事言つくな？ な？」

ミウラ・ケイタはシグナムに捕まってしまった。

逃れる事は出来無い。

連行される。

風呂場。シャワーのみの簡単な設備ではなく、ちゃんとした浴場になつていての方に連れ込んだ。

それも女湯の方に。

ミウラ・ケイタを先に押し込み、シグナムは女湯の前に清掃中の看板を立てる。

「ふ、完璧だ」

多少強引だったかな？

いや、主のはやはては言った。どんな手段を使つても良いこと。ケイタには逃げられないようにバインドをかけてある。

踵を返し脱衣所に向かう。

「バインドまでかけて、本氣かよ

「ああ、なあに、スキンシップだ。エリオだつて訓練のあとは脂と一緒に風呂に入つてるぞ」

「アイツは子供だろーが！」

知らんな。

脱ぐ。豪快に。

脱がす。豪快に。

うわ、これがアレか！

会議のあと勉強会で見た映像の物より大きいぞ？

「拙者、下心なぞ持ちあわせておらんで御座る」

「おい。侍になつてんぞ」

浴場にて、身体を清めたのだ。隣同士に大きめの風呂に入っていた。シグナムは終始いつも通りを装つており、それを見てミウラ・ケイタは勘違いした。

ミウラ・ケイタはシグナムがただ口をトリオと同じような扱いをしたいだけだと思ったのだ。

思えばシグナムの見た目は若いが実際の年齢は遙か年上であることに気付いたのだ。

しかし、それはシグナムの策略であった。

「さてつと

「出るか」

私の覚悟は決まった。

手を動かす。

握るのは男性の弱点だ。

「ち、ちょ、何してんの？」

だが、お湯の中確かに熱くなるモノがあった。

つまり私に反応しているのだ。

直立させる。

もちろん、そっちの方ではなく身体の方を。

勉強会の映像ではコレを口でしたり、胸で挟むのであつたな。
ならば、学んだ事を実行する。

抵抗があるが、両手を相手のお尻に添えて持ち上げるように支える。
座り込む事もできず、ただ私の頭を押さえる様に相手は手を添えた。
が、その程度の力で止まることもなく、頭を上下に動かす。
舌も、そして吸引する。

窄んだ口内に出された。

確かに飲むのであつたな。
確かに飲むのであつたな。

苦い。だが、癖になりそうな味だ。

相手を持ち上げてタイル貼りの風呂場に寝かせて襲う。
痛みが走るが我慢出来る範疇だ。

「ふふ、入ったな？ ん？」

「や、やめる。俺には彼女が……」

口を口で塞ぐ。

事後、その日のシグナムを見た男性局員はいつもに増して美しいと
感じた。

一方、疲れた顔とうつろな眼で歩くミウラ・ケイタを見た局員は仕
事熱心にも程がある。彼に休みを、と考え仕事の効率が上がったと
いつ。

裏切りと謀略。

策略と榨取

配点：（剣士）

どこまでがセーフなのだろうか？

やばくなつたらノクターンへ行為の部分だけ移動させよつ。

あと今更ですが細かな設定とかは気にしないで下さい。

原作を見なおしたりWIKI見たりしますが、間違つていても気にしないでね。

第四章 烈火の将は実力派（後書き）

今日から休みに入る人も多いでしょう、ということで更新。

第五章 どうかしている人達（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第五章 どうかしている人達

どうじょ？

どうしてこうなった？

恋人がいるのに他の女の子と関係を持つてしまった。

浮気したら殺されるかな。

いや、アレは浮気ではない。

無理矢理と言う名の何かだ。

反応してしまったのは仕方がない。だって男の子だもん。
無かつた事にしよう。

いや、ハ神はやてがいる。

アイツがヴォルケンリッターの行動を把握していないわけがない。
顔、合わせづらいな。

シグナムは思う。

先んじて奪つたはいいがどうしたものかと。
まず、主であるはやてに知らせるべきか？
それとも、なのはに知らせるべきか？
どちらにしても、何らかの反応はあるだらう。
主は褒めるだらうか。それとも悔しがるだらうか。
いや、どうやってそれを成したのかを問うだらう。
さらに、行為の詳細まで聞く。

その上で、ミウラ・ケイタを私から取り上げるだらうな。
ならば、黙っているか。

思いだすのは、朝の快楽である。

始めてであったが、よほど相性が良かつたのだろう。
痛みはあつたがそれ以上に快楽と満足感があつた。

アレを主に渡してしまつたら、きっと墮落する。

騎士であるからこそ、主を守る役目として盾となつて。
アレの味を知つてしまつたら主は駄目になつてしまつ。

「是非も無し」

私が墮落を受け止めよつではないか。

高町なのはとフェイント・テスター・ハラオウンは普段通りであつた。

結局、高町なのははフェイント・テスター・ハラオウンの望みである、ミウラ・ケイタを今度の休日に貸すと約束したのだ。

そうしなければ相手が正常にならないと判断したためである。
また、過去の約束を破つてしまつているといつ罪悪感からも仕方なしに承諾したのだ。

だが、高町なのはは傑物である。

貸すとは言つたけど、私が付いて行かないとは言つていない。

それに、ケイタは私の彼氏だ。なら、彼女である私が付いて行つても問題はないはずなの。

恐ろしいほど静かな日であった。

管理局には珍しく、比較的事件も少なく、警報もならないのだ。
警察と同じような組織としてそれは喜ばしい事である。

だが、その静寂も昼過ぎに緊急事態を知らせる警告が鳴り響いた為

管理局は揺れた。

そう、時空管理局本局が揺れたのだ。

それは、

「 、全管理局員に警告！ 高町なのは教導官及び、ミウラ・ケイタ教導官が意見の対立の為、戦争します！ マジヤバイです！ アレが、エースオブエースと『不敗の魔法タンク』の戦い！ 皆！ 見ないと損だよ！ え？ 止めろ？ 無理無理！ だつて無敵のエースと不敗のミウラ・ケイタですよ！」

局内放送に管理局員は揺れた。

「これは、仕事どころじゃねー。今すぐ見物だ！ 滅多に見られるのんじやないぞ！ 新人、俺が許す！ 仕事を一時中断して見に行くぞ」

「さすが、上司！ ついて行きます！」

「我が隊も私に続け！ 戰術の神とまで謳われるミウラ・ケイタの生戦闘が見れるぞ！」

「エースオブエース、高町なのはか、不敗の魔法タンク、ミウラ・ケイタかどちらが勝つか……。さあー、賭博だ！ お前らどうして賭ける？」

「あわわ！ ヤバイですよー。非殺傷設定でもマジ殺し合いで見えるんですけどー！」

「大丈夫だ。問題ない」

各自、思いはそれ雖然が、レベルの高い訓練だと自分自身に納得させる理由を思い描いていた。

シグナムに襲われちつた。テヘッ。

つてやれば許されると思ったんだが、マジ怒りでマジモードでマジ砲撃を撃つてくるとはね。

管理局本局の局員達は見物に徹するみたいだ。建物に被害が出ないようじにバリア貼つて、用意周到な事だ。止めるのを諦めてこちらが力尽きるのを待つスタンスだ。

さて、俺の彼女で怒りモードの高町なのは空戦S+だ。一方俺は空戦B。教官試験ギリギリのBだが、それは実技試験のランクで筆記試験は満点だ。

「うひやつて、本気で戦うのつていつ以来？」

「んー？ 確かなのはが開催した小学校卒業記念決闘トーナメント以来だね」「

確か合つているはず。

「懐かしいね。あの時より私、強くなつてるよ？」

「そりゃ余りある天賦の才能に努力を重ねて弱くなる奴の方がおかしいって」

俺だつてそこそこに強くなつていて。

悠長に話し合つていてるが、砲撃の威力は本物だつた。
デイバインショーターで包囲されて外から見れば窮地に見えるだろうな。

「観念した？ 今ならシグナムさんは事故つてことで我慢してあげるけど？」

「事故つていうか、相手は狙つてやつた節があるから今後もないと
は言い切れないな」

許すも何も、シグナムに襲われたって言つた瞬間に砲撃だもんな。今になつてやつと少しは冷静になつてきたようだ。

「それに、俺は

秘匿回線の念話で続ける。

『なのは一筋だつて言つたんだけど、相手が聞かなかつた』
『それでも、逃げるとか、何なら武力行使で倒すとかできたでしょ？ 不敗の二つ名ついてるケイタならできたでしょ？ だったら、それは、私以外に下半身が反応したつてことなの！』

しゃあないだろ。男だし。

「平行線だな」
「平行線なの」

許す、許さないの平行線。
だから、負けたほうが悪い。

「意見が分かれた時は
「決闘なの！」

見物していた管理局員は感嘆をあげる。

「あの状況下から脱出できる術があるとは……」
「砲撃をギリギリで避けて砲撃線上を飛んで反撃？」
「それをいなして、さらに反撃。クロスカウンターをちらにカウン

ターで返す高等技術だぞ……！」

「高等技術のオンパレード。新人はこれを見て学べ！ 盗め！」

「魔法弾をチエーンバインドで弾いた？！ あんなのどの教科書にも乗つてないぞ？！」

「いや、可能だ。魔法である以上、通じる。が、あんな使い方があるとは……。不敗の名はある柔軟な発想と魔法技術の多さで成り立つていてるというのか？！」

その後、3時間に及ぶ戦闘は両者引き分けで終わる。
エースオブエースはその実力を名実共に再度知らしめ、不敗のミウラ・ケイタはやはり、不敗であった。

ぶつかり合う恋人達。

天才と秀才。

果たしてどちらが優秀なのか。

配点：（痴話喧嘩）

聖戦に参加の皆様方、作者です。

暇つぶしにどうぞ、あと、なのは完売！

身体に気をつけて戦いに挑んで下さい。

私は実家でのんびりしてます。

第六章 金髪娘の暴走（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第六章 金髪娘の暴走

喧嘩の後は仲直りだ。

互いの意見の平行線は折り重なる境界線上に落ち着く。つまり、今後は全力で高町なのはを愛すこと。そして、襲われないように全力で逃げること。

それが互いの意見を合わせたものであり、決闘が引き分けた以上、互いの意見を尊重しあつたものである。

フェイト・テスター・ハラオウンは正確にミウラ・ケイタの消費魔力量を見抜いていた。

決闘と言う名の訓練で処理された一人の戦いは引き分けに終わった。高町なのはの消費魔力量は全体の7割近く消費されている。一方、ミウラ・ケイタの消費魔力量は全体の4割程度だ。つまり、余裕を持って引き分けたのだ。

だが、フェイト・テスター・ハラオウンは知っている。ミウラ・ケイタは戦いには精神力と集中力が必要だ。魔力を使い切る前に、精神消耗と集中力の消耗で戦えなくなるのだ。磨耗した状態では魔力使用は難しい。

「つまり、今がチャンスだね？ バルディッシュ！」

『ミウラ・ケイタは今、碌な魔法は使えないはずだぜ、マスター。俺が見るに、弱った得物だ。今なら美味しく頂ける好機だと見るぜ』
「うん！ 行こうバルディッシュ！」
『了解した。ミウラ・ケイタは今自室にいることを感知している。

高町なのはは疲れて医務室で睡眠中だ

さすが、バルディッシュ。聞かなくても知りたいことを教えてくれる。

寝ている男を起こさない様に静かに部屋に侵入する。

ドアのロックはバルディッシュが破ってくれた。

侵入した後、ドアに再びロックをかける。

「スワー、ハアー」

ミウラ・ケイタの部屋の匂いだ。
彼はベッドの中で眠っている。

服を脱いだほうがいいかな？

「どうすればいいと思う？」

『犯すべきだぜ。まずは起きない内に拘束してしまつのがいいと思うぜ。その後は、好きに犯せばいい』

うん、なら。

「バルディッシュ！」

『イエス、マスター』

起こさない様にバインドをかける。

そして、歩みをベッドに向けて、

「はあはあ、もう、我慢できそつにないよお

下着だけ脱いで、相手の足元から布団の中に侵入した。

布団の中、確かな温もりと熱く硬い物を握る。

そのまま、滑りこむように相手の顔を見る。

握った物を既に蜜に溢れて準備が整つた所へ挿入した。それでも相手は起きなかつた。

痛みがあまりない。

話に聞いている限りでは初めては痛いはずである。だが、それは自分の秘所の溢れ具合から自分で納得した。必要以上な性的興奮で快楽しかなかつたのだ。

彼女は思う、自身は淫乱なのかと。

それでも、性感と達成感からじまく思考ができず、腰を動かすだけのメスとなつていた。

ミウラ・ケイタは朝早く目覚めた。

そして、心地の良い重みと柔らかさに気付く。

「え？」

金の髪。流れる金髪に見覚えのあり過ぎる顔。

フェイト・テスタークサ・ハラオウンだ。

何故か彼女はシャツ一枚で、布団の下。

それを確認して絶望した。

穿いていない。俺も、フェイトも。

そして、明らかに血の跡があり、さらに氣怠い。

導かれた答えは、

「や、ひれた！」

寝ている間に襲われたのだ。

起きない自分にも問題があるのだが、まさかドアのロックを破つてまで侵入されるとは思っていなかつた。

生々しくも使用済みティッシュが4枚転がつており、その数が何を示すのか、恐ろしくて考えたくなかつた。

完全に覚醒した頭で考える。

取り敢えず、シャワー浴びよう。

「げ……」

自室にあるシャワールームには鏡がある。
それを見て、

「フュイトってキス魔なんだ……」

キスをされた印が幾つも唇の周りに付けられていた。

「どうして起きないかな俺」

シャワー後に着替え、自分の服とフュイトの服を洗濯機に放り込み、証拠を隠滅する。

さらに、部屋を清掃して、匂いを消すために消臭剤を巻いた。
それでもフュイトが眠つたままであった。
夕べはお楽しみでしたね……。

「俺は何をやつてんだか……」

『そいつは交尾だろ。マスターは随分と斬り取つて満足してたぜ』

俺の独り言に答えたのはバルディッシュュであった。

『ミウラ・ケイタが起きなかつたのではなく、起きたかったんだぜ！ 俺ってマスター思いのデバイスだら？』

それはつまり、

「テメー！ わては、催眠系の魔術を？！」

『おう！ 何、マスターがミウラ・ケイタを襲い易いようになインストールしておいた。お陰で大成功！』

よし、コイツ初期化してやる。

「んつ……。あれ？ ヒービー？ あ、あー！」

フェイト起床！

「私、やつちやつた……。本当はばれない内に帰るつもりだつたのに！ バルディッシュュ！」

『イエス、マスター』

セットアップだと？！

フェイトは持ち前の高速移動でドアを開き、振り向きざまに、

「え、えと、私！ 後悔しないからー、あと、気持よかったです！」

言い放つて逃げた。

服、どうやって返そうかな。

後日、服はいつの間にか回収されていた。

ミウラ・ケイタはドアのロックを厳重な仕様に変更する、と決心した日である。

その日以来、ミウラ・ケイタの部屋のロックは堅牢なシステムを組んだ生体認証システム、声紋認証システム、指紋照合システムを導入し、さらに、IDカードを提示し、パスワードを入力しなければ開かない重厚な守りになった。

局員の間ではその厳重さから何か重要機密を扱う仕事をプライベート空間まで使ってする勤労者として称え、各員がんばりうと思わせた。

金髪娘の暴走

機械の暴走

配点：（フロイト）

第七章 タヌキ娘の知略（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第七章 タヌキ娘の知略

「ぐおおおお

「ひつ」

それは叫びであった。
それは嘆きであった。
それは猛りであった。

血の涙を流す人物は咆哮する。

「おおおおお！ なんでや！ 既になのはちゃんには先を越され！
フロイトちゃんまでに遅れを取つた！ 私は悔しい！」

「は、はやてひゃん……」

「……」

「はやて……」

「落ち着くですー」

ハ神はやての豹変に、シャマル、シグナム、ヴィータ、リインはそれぞれの反応を見せた。

シャマルは取り乱すハ神はやてに動搖し、シグナムは黙り、ヴィータは同情し、リインは宥めた。

その中でシグナムは恐れていた。
まずい、まずいで御座る！

ここに来て、ミウラ・ケイタとの関係を黙つていたことを後悔した。
今更言えるわけがない。

リインは知っているはずなのに今まで主であるはやてに云えていな
いらしこ。

それは、リインが思った以上に腹黒だからだろうか？
それとも別の理由があるのだろうか？

分からぬまま、はやての絶叫を聞いていた。

リインは熟考する。

シグナムの功績を使う札と考えてどうやれば自分にチャンスが回つてくるかを複数思考で考えた。

人間化すればおおよそヴィータと同じ位の容姿になる。

しかし、ミウラ・ケイタがその容姿に反応するかしないかが問題であり、ヴィータが結ばれなければ自身もまた、結ばないと考えたのだ。

よって、リインはヴィータが結ばれるまではシグナムの功績を黙つておく事にしたのだ。

また、先んじてシグナムとの関係を八神はやてにバラされたくなければ私を抱けと脅迫しても良いのだ。

シグナム以外で次にチャンスがあるのは自分自身だと確固たるモノがあり、八神はやての動搖の様も滑稽に見えてしまうのは余裕があるからだろうと言える。

実の所、フェイト・テスター・ハラオウンの行動も伝えなくても良かつたのだが、彼女が彼の部屋に入るのを一般局員が目撃しており、その局員は仕事の打ち合わせか今後の仕事の話だらうと思つていたようだが、リインはこの局員からいはずれ漏れる事を懸念して、早めに手を打つたのだ。

それが、フェイト・テスター・ハラオウンとミウラ・ケイタの関係を八神はやてに明かすことであった。

八神はやての階級は二等陸佐である。

よつて、その権限からアクセスすれば一人のスケジュールが改変できるのである。

昨日の一人は部屋で今後の機動六課について朝まで仕事という事になつてゐる。

そのスケジュールは一般局員でもその氣があれば確かめられるため隠蔽工作は完璧である。

あまり、無理のない変更でよかつたですー。

八神はやては一通り感情をさらけ出したことによつて落ち着きを取り戻していた。

そして、天啓が降りる。

本日の仕事、機動六課の部隊長庁舎視察。

それは、”誰を視察に同伴させても違和感なく仕事”と言いつ切れるのだ。

「ふ、ふふ、ふはははは。アーッハッハハ！」

「ついに壊れたか主よ」

「ボケエ！ シグナムのボケエ！ リイン！ 急遽ミウラっちの仕事を変更や！ 機動六課の部隊長庁舎視察に連れて行く！ 建前は、もし、庁舎を敵に攻め入られた時の為にどうすればいいかの見地を戦略講師の意見を聞く、や」

「り、了解ですー」

何もなかつた。

そう振る舞うのはフェイト・テスタロッサ・ハラオウンヒミウラ・ケイタであつた。

午前は仕事で一緒に執務官補佐であつた。

午後の仕事は急遽変更で八神はやての視察に同伴。

本当なら戦術教導官の講師を新人にするはずであったが、それは他の誰かに振り分けられたようだ。

まあ、引継ぎと資料は渡してあるから問題ないだろう。思惑通り、現場に出ることがなくなりよかつた。

かと言つて実戦の勘を落としては身も蓋もないので、その内誰かと実戦訓練が必要だ。

ならば、横にいる人物に声をかけよつ。

「なあ、フェイト、今度実戦訓練やうづぜ」

「え？ もう！ 曜間からエッチな事言わないでよー。」

夜の実戦訓練ではない。

アホの子だ。

「いや、現場に出ることなくなつたからと云つて腕を落としたら駄目だろ？」「

「あ、そつちかあ。ごめん勘違いしちやつた」

顔を赤らめて謝られたので許そつ。

美人の恥ずかしがる顔はそれだけでご馳走なのだ。
まあ、なのはには負けるがな。

昼食を取る。

久々になのはと二人きりでご飯だ。

「ひつやつて一人で食べるのつて久しぶりだね
「そうだね。何かとはやてかフェイトがいるからね」

そう、狙つたように彼女達は一人きりでの食事を邪魔していくのだ。
それが珍しくなかつた。

四人掛けのテーブルに正面同士で向かい合う。
このテーブルに乱入する勇氣のある人物は彼女達以外にはいなかつた。

平和である。

だが、ミウラ・ケイタはフェイト・テスター・ハラオウンの事をどうやって言い訳するのか思考していた。

まあ、また、決闘になりそุดなと予感していた。

短期的に二人の女性と関係を持つてしまつた。
それに激昂されるだろう。だからほとぼりが冷めるまでは黙つておこうと考えた。

目の前の彼女には笑顔が似合つのだ。

「ね、次いつしよつか？」
「ぶつ！」

工口い彼女だ。

「今晩は？」
「いいよ」

二つ返事であった。こうして二人は午後の仕事に活力を得た。

騙し、騙され策に嵌められるのは誰か。

配点：（主人公）

第七章 タヌキ娘の知略（後書き）

誤字修正

第八章 歩くバカと怒る彼女（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第八章 歩くバカと怒る彼女

「これ、どう思いますか？」

「凄く、綺麗ですね」

ハ神はやは仕事の時は標準語である。それに答えるミウラ・ケイタもまた、仕事の際は敬語である。いくら同期で同年齢でも上官である。

「ハ神二佐。戦略的にココを制圧することは難しいでしょう。あるとすれば主力部隊が出払った状態を突かれる場合です。その際に各主力戦力が交戦状態であるのなら被害は大きいでしょう。その場合、庁舎内の非戦闘員の脱出経路、脱出方法を確立しておけば被害は建物だけで済みます」

「なるほど、主力戦力の分断とそれに乘じた侵略行為ですか。確かに非戦闘員の脱出訓練は必要ですね」

ハ神はやは元々頭の良い人物である。よって、話が通じやすい相手だ。

意思疎通が通りやすく、また話す内容も質の高いものがあるので、ミウラ・ケイタは仕事時のハ神はやてに好感を持っているのだ。

「さりに言えば、緊急事態が起きた際に自動に防御陣が発生させられるシステムを構築すれば建物はしばらく非戦闘員の盾となってくれるでしょう。その間に脱出、ないし、後発隊の到着ができるれば理想的ですが、予算が降りないでしよう」

「ふふ、まあ、それは仕方ないことです。非戦闘員の脱出訓練、ま

た、重要書類などの運び出しも命めた効率の良い脱出経路を考えましょう」

「そう言えば、重要書類を忘れていたな。

人命優先に考え過ぎた。重要書類はこの庁舎が破壊された場合、その後の再建に必要なものになつてくるのだ。

「では庁舎内の脱出経路を歩きながら考えましょう」

「ええ、もう一度、今度は非戦闘員が脱出する事を前提とした視点で庁舎内を周ります」

1時間後、あらゆる想定で脱出経路を考えた。

それを図に書き込んだものができた、仕事は終わりだりうと思つた。

「△△は私の部屋になります」

「やうですね」

ソファーに座り込むはやて。

それは仕事終了と言つた感じであつた。

「△△いらっしゃも座り？」

「ん。はやても仕事お疲れ」

呼び名で完全に仕事終了だと理解した。

「設備自体はもう生きてるからお茶いれてーな
「やうこつのせ座る前にいつてくれ」

座つた瞬間にまた、立ち上がる事になつた。

冷蔵庫にはコーヒーとお茶があつた。

「なあ、『一ヒー』とお茶があるけどどうがいい？」

「お茶で」

なら、俺は『一ヒー』だな。

「はいよ」

「あんがとー」

ソファーは「レ」字のものであり奥にはやてが座り手前に俺が座った。左奥のはやはては股を開いており、ガラステーブルの下でそれが見えていた。

それに視線が言つてしまつるのは男の正しい脊髄反射だ。

薄水色か。

何故か今日は黒タイツを穿いていないな。

気温も暖かくなってきたし必要ないのだらう。

「すけべ」

「何のことやら……」

10年近い付き合いでも恥ずかしいものは恥ずかしい。
はやはてソファーを猫が歩く様に四足歩行で寄り添つてきた。
そしてそのまま、猫が主の膝上に丸まるように顔を乗せてきた。

「どうした？」

甘えたいのだらうか？

この位のスキンシップは何回かあつた記憶がある。

「四の五の言わずに私の処女奪えや！」

あつという間にズボンが開かれた。
抵抗する、が。

「力が入らない？」
「シャマル特製の毒を盛った」

飲み物に即効性の弛緩薬か、しびれ薬が盛られていたのだ。

「先に解毒剤を飲んでいる私に落ち度はないで？」

ソファーに座つたまま、跨る形で散る。
痛みは薄く、思った以上に性感が強かつた。
やめろと抵抗する男にさらに興奮する。
だからこそ、犯し抜く。

唇を貪り、男の象徴を貪り、中で貪り尽くした。

夜。

高町なのはどデートして、ホテルに外泊した。
ミウラ・ケイタの特筆すべき点は保有する魔力量と歴戦の戦闘経験
からなる戦術、戦略眼である。
また、さらに追加すべき項目が増えた。
それは、精力の回復量と貯蓄量が一般的な成人男性よりも数倍ある
のだ。

それを自覚する日であつたとミウラ・ケイタは自分自身で自笑して自覚した。

腕の中にいる高町なのはを愛しているのにも関わらず、この数日間で数人の女性と関係を持つてしまつたことに罪悪感と後悔があつた。しかし、それも仕方の無かつた事と割りきつて前に進むポジティブ思考の持ち主でもあつたのだ。

高町なのはは許せる女であつた。

恋人と同じくらい好きな親友達がいる。

本当は親友達が自分の恋人に好意を持っていることに気づいていた。それでも、恋仲になつた以上、独占するのは己だと自負しており、どれだけ浮気されても最終的に自分の元に戻つてくるのであれば一度位なら許そうと思っていたのだ。

しかし、三人も。

それも親友達に襲われると言う形で身体を許した恋人に激昂するの仕方は無いことである。

だから、全力全開で戦いあつた。

管理局の訓練場崩壊という結果を残した戦闘は後にエースオブエースを怒らせてはいけないという教訓になつた。

それを相手に敗北をしなかつた人物もまた、要注意人物とされた。

伝説の三提督直筆指令。

・高町なのは及びミウラ・ケイタはやりすぎたのでちょっと頭冷やす為に一人仲良く3日程休暇ね。

猛る女。

嵌める女。

配点：（怒り）

第八章 歩くバカと怒る彼女（後書き）

誤字修正

第九章 俺のなのはがこんなに……（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第九章 僕のなのはがこんなに……

休暇一日目の朝。

高町なのはとミウラ・ケイタは一人で市街のホテルに泊まっていた。日が昇ると同時に一人は繫がつたまま行為を止めること無く互いに求め合っていたのだ。

戦果として合計で6回の攻防が繰り広げられ、丸一日を使って戦闘は行われたのだ。

休暇二日目の昼。

互いに食事の休憩を挟みながら繫がつてあり、三大欲求の2つを満たしていた。

不敗の一つ名を持つ男は初めて負けを認める事となる。
だが、戦果に傷はつかない。何故なら、非公式の戦闘行為であるから。

休暇三日目の夜。

エースオブエースは男に不覚を取り敗北を得る。

互いに弱点を知り尽くしたのだ。

エースオブエースの弱点は首筋から背中、臀部周辺と太ももの根元から上である。

あらゆる攻防を繰り広げた結果、不敗の男は後ろを取り攻める事がエースオブエースに取つての最大の弱点と知ることになるのだ。

一方、男の弱点は胸にある突起であり、本来は排泄する為の機能を持つ箇所を攻められる事が何よりの恥辱であり、同時に弱点であつたのだ。

互いに休暇を終え本来の仕事に戻つた際、女はより美しく、女の色
気を醸し出していた。

男のほうは栄養を搾り取られた植物のような枯れ具合であったが、
どこか満足気であった。

「うーん。久しぶりの仕事に感じるの」

高町なのははたつた3日の休暇であったが、充実したものであった
と確信を得る。

「さて、新人さんの準備なの！」

それは機動六課に必要な人材を集める為の重要な下準備であるのだ。
戦闘系技能の将来的な伸びしろを持つ原石。
それを見極めて人材を集める。

ハ神はやての夢である自分の部隊を持ちたいとう夢を叶えるため、
充実した気力で仕事を再開した。

仕事の効率を取るか身の安全を取るか。
天秤に乗せられた案件は考えるまでもなく身の安全を取る方に傾いていた。

しかし、退路を完全に確保した状態であるのなら話は別である。
つまり、ミウラ・ケイタはシャマルが支配する空間の医務室に足を
運んでいた。

「つまり、栄養ドリンクで効果が高いものが欲しいってことね」

「ああ……」

俺は医務室の扉の向こうにいるシャマルに話しかけていた。
退路上に立ち位置を配置しているので、逃走ルートは完璧だ。

「それにしてもケイタ君。医務室に入つたら？ そんな場所で立ち話もなんだし、治療を求める相手の診断もせずに取り敢えず栄養ドリンクをと言われても私、困っちゃうわ」

その微笑みには癒しの力が込められていくように感じた。

「俺は困らないし、急ぎの用件があるから、適当に栄養ドリンクをくれると助かる。時間がかかるのなら俺は立ち去る」

最大の警戒心を払う。さすがにコレ以上彼女であるなのは以外の女性と関係を持つ事はしたくない。

外見年齢は22歳相当で姉属性を持つ相手は俺に取つて難敵である。完全に防御を主軸とした戦い方をされると攻略しにくいタイプであり、作戦指揮や参謀までこなせるので厄介である。

そして、唯一俺達の中で外見年齢が高く、皆の姉的存在を担当しており、全員に説教のできる人物もある。

俺自身、過去何度も説教されながら治療を受けるといつ体験をしている。

「まあまあ、なら早めに済ませましょ’ねえ」

シャマルは微笑んだまま、不気味な雰囲気を醸し出していた。
撤退！

「「」」は通さん……」

「ザフイーラ、テメハ！」

盾の守護獣だ。

シャマルが姉ならば、こいつは兄的な役割だ。

最近は犬モードが多い。そしてその犬は忠犬であつた。

盾である魔術を広げて医務室に押し込む形で俺を追い込んだ。

同時に、扉が自動的に閉まった。

「私の役割は守りと癒し。けど、時には計略を働くことだってあるのよ？」

医務室というには程遠い魔法の仕掛けが施された部屋の中。男は薬を盛られていた。

それは医務室の管理人である女性が独自に開発した栄養ドリンクEXであり、その効能は元気になる事である。

それは男の望むものであったが、せっかく充填した物を吐き出していた。

女は姉である役割として寝かした男に跨り上下に腰を動かしていた。その上で自身の身体を見せつけるように背を仰け反っていた。

結局、疲れは余計に溜まり、虚ろな眼で死んだように働く彼を誰もが恐怖した。

「仕事の鬼……！」

翌週に控えた機動六課新人の試験の為、高町なのははミウラ・ケイタは打ち合わせを行つていた。

「スバル・ナカジマとティアナ・ランスターか……。どうも一人には縁があるらしい」

ミウラ・ケイタの言葉に高町なのはは頷く。

「スバル・ナカジマって、確かに私達が昔助けた娘だよね？」

ミッド臨海空港の大規模火災事故の際に姉と共に助けた娘だ。

「姉が居たはずだ。確かに俺が助けた方だな。まあ、良い所は全部フエイトが持つていつたが……。それにしても、シュー・ティングアーツの使い手か。それにティアナ・ランスターと言えば、ティーダの妹か」

スバル・ナカジマとティアナ・ランスターには縁がある。その二人に俺も縁があるようだ。

ティアナ・ランスターの兄であるティーダ・ランスターとは昔に仕事で一緒だった事がある。

優秀な射撃型魔導師で、あの時の次元犯罪者を確保するときにも年下である俺の意見を素直に聞いてくれた好青年という印象がある。ならばその妹にも期待が持てる。

「兄と同じく射撃型魔導師か。スバル・ナカジマは近接戦闘系。良いコンビになりそうだな」

夢と目標。
準備と未来。
配点：（新人）

第九章 俺のなのはがこんなに……（後書き）

誤字修正

第十章 新人と機動六課（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第十章 新人と機動六課

「まづまづだな。二人共良い感じのコンビといつのに間違いはない。

けど」

「まだ、実力と実戦が足りない、でしょ？ ミウラ教導官」

新人二人の様子を俺とのはで見守っていた。
仕事である以上、呼び方が固くなる。

「高町教導官。彼女達、たぶんゴール付近でやらかすと思うのでサ
ポートを頼みます」

「ん、了解」

誰も見ていないからと言つて不意打ちでキスとは。

スバル・ナカジマは憧れの人物を前に試験の是非など忘れて高揚して
いた。

「あ、あの私、高町教導官に憧れて……。それに、ミウラ教導官も
尊敬していく……。とにかく、私、人生の最大の幸福にいると思いま
す！」

憧れの二人。尊敬の二人。

「ちょっと、スバル！ いい加減にしなさいよ！ 私だってミウラ

教導官のサイン欲しいんだからね！」

スバル・ナカジマは体術の心得を持っており、ティアナ・ランスターは射撃の心得を持つていた。

私は嬉しかった。

体術の心得の作者であるミウラ・ケイタに会えた。

だから、ちょっと周りが見えなくなっていた事に反省した。

「ごめん。ティア。私、ちょっと周り見えなくなってたよ」「わかれればいいのよ……」

ティアの眼。

マジマジと上官であるミウラ・ケイタを見る私は、期待出来る。

今度の同人誌のクオリティが楽しみだ。

「書籍のファンはありがたいが、仕事中だ」

怒られた？

「スバル・ナカジマ一等陸士。近接戦闘は田を見張るものがある。先ほどのは高町教導官の真似事か？」

アレは、なんといつか……。

憧れの人への技名を押借したものだ。

「ティアナ・ランスター一等陸士。射撃と幻術、状況判断もなかなかだ。兄と比べるのはあらだが、潜在的な能力と成長性を見ると、いずれ兄を超えるだろう」

ティア。「う、羨ましいな。
もつと私を褒めて欲しい。
私はほめられて伸びるタイプだ。

「スバル・ナカジマ」等陸士は体力と魔力が恵まれていていた
から、鍛えればいずれ近接戦闘に欠かせない主戦力になるだろう。
まあ、試験 자체はダメダメだが」

褒められたが、試験の合否が告げられた。

試験終了後直接合否を告げられるのは初めてだ。

「不合格……。スバル！ アンタが悪い！」

「そんなあ～。試験中は私を置いて合格しきつて言つた癖にい～」

落胆する私達にミウラ教導官はさとうに告げる。

「と、まあ口頭で不合格通知を出した所で、これは正式な合否発表
ではないので心配しないで欲しい」

「ティアナ・ランスター」等陸士はまず、左足の治療だな

そう言つてミウラ教導官が私に近づいてきて、挫いた左足のブーツ
を、脱がそうと屈んだ所で、

「ち、ちょっと待つてください。ブーツは自分で脱げますから！」

苦言を言つのであれば、今の私のブーツを脱がそうとしないで下さ
いと言いたい。

汗臭いかもしないし、足が臭うかもしない。

それを上官である人物に言えるはずもなく、されるがまま治療をされる。

「捻挫だな。この足じゃあ碌に動けないから遠隔の幻術に切り替えて味方のサポートに徹するか」

簡単に見抜かれていた。

ああ～。やっぱりこの人、良いなあ。

本局で不敗の名将。

エースオブエースと肩を並べる人物。

非公式だけど、若手女性局員の付き合つてみたい男性アンケート1位。

さらに、将来玉の輿ランキング上位。

ついでに、私の同人誌で攻め受けどちらを書いても売上上位。

人気があるのは兄のティーダ・ランスターとの絡みだ。

それはどうでもいいわ！ このアングルの顔を脳に叩きこまなければ！

やばいわね。ちょっと濡れてないかしら……。

「自分の身を守る事も優先すべき事だ。残量魔力も少ない。その辺りは今後、機動六課に入れば解決していける」

それは、つまり、

「再試験があるって事ですか？」

左足の治療を終えたミウラ教導官が笑顔で頷く。

「そうゆうこと。頭の回転もよろしい。今後の活躍に期待するよ

「サービスにも気をお配りですか？」ミウラ教導官
「ハ神一佐。それはどういう意味でしょうか？」

自覚ナシかい！

先程のやり取りだ。

褒めて貶して、持ち上げて褒める。

トドメに笑顔や！

多感な時期の女の子相手にようやるわ。

「いえ、見事な勧誘でしたので……」

「サインのことでしょうか？試験は終了していたので私としてはセーフだと思いましたが」

話が交差していない気がする。

「その辺りは私としては兎も角もつづつもりはありません」

頭の上に疑問マークが浮いていそうな顔だ。

女の子にフラグを立てた事に自覚は無いらしい。

これは新人に対して注意が必要な案件だと確信する。

職場恋愛ナシにしてやろうか……。

「なあ、ケイタ。実際あの二人どうなん？」

「放置しておくには惜しい。入隊するかは彼女達の判断に任すが出来れば機動六課に入れておきたい人材だな」

まあ、あの一人の様子だと確実に入隊するだろう。

確かに能力の伸びしろを鑑みるとミウラっちの言うとおりだ。

ついでに、勇気を持つて呼び捨てにした事に関しては何も反応はないのはなんでやろ？

「はやて、別に呼び捨てで構わないし、今更って感じだがこれからもよろしく頼むわ」

何を頼むかはわかりきつた事だ。

こういったコチラの欲しい解答を自然としてくれる辺りがミウラっちの良い所であり、悪い所だ。

二人の新人。

特急フラグメーカーの主人公。

配点：（フラグ）

第十一章 バカ新人と素直な新人（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第十一章 バカ新人と素直な新人

機動六課規定。

- ・ミウラ・ケイタは機動六課女性局員の夜の相手を断らない事。
- ・ミウラ・ケイタは機動六課女性局員の一文が書かれていた。それを剥がして破いて捨てたのはミウラ・ケイタであった。

「さて、仕事、仕事」

庁舎内の全ての規定事項を剥がして処分した。
そして、機動六課の長へ文句を述べに足を向けた。

「冗談やがな。冗談。まあ、本人が承認するなら再度ばら撒くけども？」
「いや、なのはと付き合つてゐし。はやて、お前バカ？」
「正常や」

仕事では真面目なのだが、自分の夢である部隊を持てた事で舞い上がったのだろう。

「舞い上がるのもほどほどに。余計な仕事を増やされたせいで、はやての総部隊長挨拶までの余暇時間が無くなつた。仕方ないからここで待つか」

「そうやね。集合15分前やし。飲み物位だすで？　ああ、前のようないいよ。普通の飲みもんやから」

それはそうだろう。

まあ、さすがに仕事寸前でハメようとするわけもなかつた。やはり、仕事には真面目なのだ。

挨拶もそこそこに新人たちの訓練に入る。だが、その前に一悶着あつた。

シャリオ・フィニーー。

通称はシャーリーで、A級デバイスマスターだ。

メカオタクのメガネつ娘。

「ミウラ・ケイタ教導官。というか、ミウラ。いい加減デバイス持ちやがれです」

「上官の前に年上だぞ……。メカラタ……！」

デバイスを持たない俺に敵愾心丸出しである。まあ、出会つた当初からこんな感じで俺に突つかかつてくる数少ない年下だ。

「うるさいですね。ミウラは全デバイスマスターの敵！ ミウラの魔力供給に耐えられるデバイスを作つていづれデバイス無しでは戦えない身体にしてみせますよ……！」

実は良い奴だ。

過去に実験したことがある。

魔力供給をデバイスで管理して供給配分を任せると、何故かデバイスがショートして壊れるのだ。

それに、デバイス無しでも戦える方法を確立していたので、デバイスの必要性を感じていない。

「シャーリーには四人の『テバイス』といつ餌で満足してもいいのか」「ふふ、同時に10まではいけますよ」

俺の理解したくない発言をしたシャーリーを無視した。

エリオ・モンディアルは純粋な憧れであるミウラ・ケイタに疲弊させられていた。

四対一の模擬戦。

剣術では何回も矛を交えたが、魔法有りの模擬戦は初めてであった。

「それぞれのランクで言えばお前達と同じかそれ以下だぞー。ほらまだまだいけるって」

飛び回り僕達に余裕を見せる。

「ぐ、それでも、強過ぎない?！」

ティアナさんの言つ通りだと思つ。

分かつたことは基本的に相手の行動を起點とした防御と反撃。

こちらの動きを完全に読みきった防御に隙を突いた反撃は脅威だ。

「キャロ、もう降参か？」

「いえ、もう少し頑張ります」

小さな女の子が頑張ると言えば年上のティアナさんとスバルさんは頑張らなければならないと思うだろうし、僕も女の子が頑張ると言うのであれば気力を出して踏ん張りうと思つ。

たぶん、そういう狙いがあるんだろうと思いつつ、改めて尊敬する。

「わーて。今日はこれまで。各自疲れを残さないよう元気なやりとりで休むよ！」休むのも立派な仕事だ

その言葉に全員がへたり込む。

その中でもキャロ・ル・ルシエとエリオ・モンティアルはまだまだ子供だ。

だから、歩けそうになり一人を抱えて運んでやることにした。

「よつと、わあ次は休憩だ……！」

「はーい」

子供は素直で良い。

「う、羨ましいなあ」

「バカな事言つてないで[写真]… エリオとミラフ教導官の資料を盗^とる撮^るわよ！」

ティアナとスバルが何か話していたようだが、離れていたのでよくわからなかつた。

訓練後には汗を流す為にシャワーを浴びるのが常識である。エリオ・モンティアルも普通にシャワーを浴びるのだが、今回はある任務を任せていた。

「ちょっと、エリオ。頼みがあるんだけど聞いてくれる?」

その依頼主はティアナ・ランスターであった。

エリオ・モンティアルとティアナ・ランスターは今回の機動六課で初顔合わせであり、初訓練の前に多少の会話をした仲であった。これから同僚として働く為、互いに仲良くするのは必要であるとエリオ・モンティアルは幼ながらに理解しており、ティアナ・ランスターの頼みごとを内容も聞かずには承諾してしまったのだ。

「いいですよ。ティアナさん」

その依頼内容は、男子シャワー室の撮影(どうぞう)であった。

もちろんティアナ・ランスターはそれが盗撮ではなく、訓練の一環とした行為であると説明をしたのだ。

「良い? あのミウラ教導官の隙を撮るのよ? それもバレないようにな? 人間の最大の隙ってやっぱり裸体になつた時じゃない?」

つまりは、秘密訓練の内容はミウラ・ケイタの隙を相手にバレない様に納める事である。

エリオ・モンティアルはその事に疑問を抱くこと無くその依頼の内容の難しさを考えていた。

「訓練中は一切の隙がないミウラ教導官の隙を突いた撮影。それもバレない様に完璧にこなすとなると、相当の隠密行動が必要になりますね。つまり、これは隠密行動の訓練ですね? ティアナさん」

「え? あ、うん。そうよ。そつそつ。そんな感じよ……」

ティアナ・ランスターは自分の嘘がまるつきり通じてさらに過大評価された事に多少の罪悪感を感じたのだが、それでも撮影されるで

あれう男性の裸体の魅惑には勝てなかつたのだ。

新人が得るものは何か。
新人が失うものは何か。

配点：（盗撮疑惑）

第十一章 ツインテールとショートカット（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第十一章 ツインテールとショートカット

ティアナ・ランスターは同人作家である。

それは、副業として行なつており、きちんと納税もしている。

その同人作品の内容は所謂男同士の掛け合いであり、BLとも呼ばれる。

その彼女の作品には多くのファンがあり、スバル・ナカジマもそのファンの一人である。

エリオ・モンディアルに依頼した物が首尾よく手に入り、今まさにティアナ・ランスターは狂喜乱舞であった。

「思った以上に大きい……。それに綺麗な柔肌。お尻の形も女性に近い。やっぱり私の目に狂いはなかつた！！」

それは、ミウラ・ケイタの素肌であり、全裸であり、無修正映像であつた。

ティアナ・ランスターは指を自身の一一番敏感な所で動かして性感に浸る。

秘蔵になる無修正映像をオカズに一心不乱に指で擦る。やがて、果てる。

しかし、己の潤滑油を使い、そのまま続行する。

オカズが高品質であることから、普段より早く果てたのだが、その空腹は收まらず一度田の咀嚼に移るのは当然の結果であった。

「ふう……」

一息。ティアナ・ランスターは息を吐いて呼吸を整えた。

「人間といつものはどうしてこうも欲深いのだろうか……」

まるで哲学者のような疑問に答える人物はいなかつた。

「セー。忙しくなるわよー」

氣合を入れてペンを握る。

描くのは自分の妄想。

ぶつけるのは自己表現。

「腕が止まらない！ これが、最高にハイってやつね！」

「ハア？！ ティーダ・ランスターは喫茶店店長？！」

「ああ、はやて。残念だったな。まあ、機動六課に誘うにしても執務官エリートならフェイドがいるし、正直入隊を進めても断られていただろ？」

ティアナ・ランスターの実の兄であるティーダ・ランスター。

そのティーダ・ランスターについてまるで調べていなかつた為、急遽経歴を調べるようにはやってから命令を受けた。

執務官のエリート空士。

しかし、ティーダ・ランスターが管理局を目指して届けをだしたそ

の日の内に突然の辞表。

そして、ある程度の精密射撃魔法を妹に教えた後にミッドチルダ某所に喫茶店を構える。

ティーダ・ランスターに自分の持つ技術を叩きこまなかつたのは、色々な魔法に触れて可能性を広げて欲しいという理由らしい。もつともらしい理由だと思うが……。

「喫茶店はとある属性に偏つた店だ」

妹喫茶。

つまり、そう言つことだ。

さらに、元管理局で執務官といつることもあり、色々な部署とのコネがある。

特に広報部とコネから、現場の女性局員の写真や、ポスターまで横流しされているみたいだ。

その辺り、グレーゾーンであり、一般人に管理局の宣伝になるという理由で黙認されている。

写真集などの売上の一冊を談合した上で分配しているらしく、かなりギリギリのラインを綱渡りしているのだ。

それでも、俺が調べるまでこの事実が出てこなかつた辺り、ティーダ・ランスターの手腕は高いと言える。

「ギリギリやな。このティーダ・ランスターという人物はなかなか、顔の割に腹黒い人物やな」

「厄介な事に、軽犯罪の犯人を捕まえたり、管理局への通報が多いのも事実だ。元管理局員で執務官だつた奴が街中で妹喫茶やつてるとは犯罪者だつて思わないだろうわ」

民間協力者として管理局に奉仕している事実も隠匿されていたのだ。何故かというと談合相手の犯人検挙がこのティーダ・ランスターの

協力によるものがほとんどであったからだ。

「まあ、談合していようが、犯人検挙に繋がっているから黙認しているんだらうね」

「はあ。ま、その件はやはうこひらも黙認しておかないとあかんのやううね」

やぶ蛇になる。

若手でハ神はやてを疎む奴らも多い。
だからこそ、この案件は黙認。

「放つておけ。たぶんそれが一番無難だ」

「燃えたわ……」

書き終えた作品は自分でも完成度の高いものだと思える。

「ティアー！」

腐れ縁である。

スバルは私の作品のファンもある。

そして、正確な作品の批評をしてくれる人物もある。
だからこそ、一番先に読ませる相手に相応しい。

「これ、すつゝく良かつたよ！ もう、濡れ濡れのグチョグチョになつちやつて……」

「聞きたくな」とを言わないでよ」

大らか過ぐるのもどうかと思つ。

そして、

「田の前でオナツてんじやないわよ?...」

平然と下着の中に手を入れて私の目の前でヨガついていた。

「えー、だつてティアはノーマルだし。今、私の相手になつてくれるので?」

レズであつた。

おっぱい魔人もある。

初めて会つた時からそうだ。

セクハラはしてくるし、同僚だつたら胸を挨拶代わりに揉む。年下の後輩には遠慮無く、生で揉む事もしばしば。
さらには、部屋では下着姿か、全裸で活動するのだ。

「ふう……。見られながらだと余計に興奮するねつ!」

「早々とイッてんじやないわよ?... それに私までオカズにしないで!」

オカズを作るのは得意だが、オカズにされるのはあまり慣れていない。

「ああ、次はこれで楽しもう」と

どいで手に入れたのか、振動するタイプのマッサージ器であった。

「ち、ちよつと、それ、後で私にも使わせなさいよ?」

評判の良い物だと記憶している。道具を使つてするのは初めてだが、それでもスバルの愉悦した様子から相当良い物だと理解できた。

どこか変な新人達。
自己を高める新人。

配点：（自家発電）

第十三章 スバル時々なのは（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。
割りとマジで原作崩壊しています。

第十三章 スバル時々なのは

度し難い変態と言えばティーダ・ランスターは自信を持つて答える。

「そう、スバル・ナカジマだ。」

実の所スバル・ナカジマは人見知りである。

そんな彼女だが、嬉しいことに自分のことを理解してくれる同僚に、ロリとショタまで付いてきて、さらに尊敬する人物が一人共々上官に着いたことが彼女の思考をしばし混乱させていた。

「ねえ、ティア知ってる?」「何をよ?」

訓練中に話しかけられてティアナ・ランスターは自分の采配に何かしら文句でもあるのかと思つた。

「ヒリオとの前一緒にお風呂に入ったんだけビビ。まだ毛も生えてないショタきのこだつたよ」

「訓練中に馬鹿なこと言つてんじゃないわよ?」

次いで浴びせられたのは、

「お~お~、訓練中におしゃべりとは余程退屈な訓練みたいだな。よーし、頑張っちゃおうかな」

ミウラ・ケイタの残酷な言葉であった。

ズタボロという言葉が似合つのは新人達全員であった。
そもそも、機動六課の訓練は他に比べ厳しい部類に入る。
少數精銳であるからその密度は濃いのだ。

「いやー、今日もクタクタだね！」

「なんでアンタはそんなに元気なのよ……」

スバルの元気さが羨ましい。

「だつて、ティア。」の後はお風呂だよ？ ショタに口づと合法的に見れるんだよ？」

「はあー。訓練で頭がおかしくなったのね」

元よりこんな感じで頭のネジが緩んでいる相手だったことを忘れていた。

全く、人の気も知らないで、気楽よね。
まあ、ショタの部分は賛同できるけど。エリオのお尻にミウラさん
のアレがインしてパンパンに……。

「ティア。今日はエリオ一緒にお風呂遠慮するつてやー。なんか
ミウラ教導官と居残り訓練だつて」

ちつ。

まあ、今日は我慢しておいつ。
いや、秘密の居残り訓練つて結構いいシチュエーションね。
やっぱり、ダメダメなエリオをミウラさんが……。

「わー、キャロー。今日もつるつるだね

「ちょっと待てー！」

純粋無垢な幼女を魔の手から守らなくてはいけない。
せっかくのお風呂なのに、疲れるって私つてエライわ！

「エリオ。まだ踏み込みが甘い。もひとつ突きのスピードをあげるなら肉体的な加速も必要になつてくる。だが、エリオはまだ肉体が成長しきっていない」

「はあ、はあ。そうですよね。まだまだ、僕には足りないものばかりですね」

ミウラ・ケイタは感心する。

エリオのひたむきな姿勢。
自分自身にできる」と理解しておつ、その上で出来ることが無い
か探つてゐる。

言わば成長中の花だ。

「肉体的なものは後々付いてくる。今はその下地として技術を磨こう。スピードを活かした戦法、悪くは無いと思つづ

「はー！ ありがとつづります」

返事は男そのものだ。

「じゃあ、居残り訓練は終了だ
「いい」「苦労様です」

律儀に敬礼を受けた。

「さて、風呂にいくかー」

「はーい」

きちんと切り分けている辺り、エリオの今後の成長が楽しみな所だ。

庁舎の部屋の振り分けは一人一部屋を使い切りだ、なのは達上官は全員一人一部屋という豪勢な割り振りであつた。

だが、俺となのはの部屋が隣同士であつたのにはさすがに驚いた。はやては俺達の事を認めていない様子であつたのだが、やはり仕事上近い方が利便性が良いという判断だろうか。

「ケイタ。来ちゃつた」

音符マークが付きそうな口調でさも普通に壁側から俺の部屋になのはが侵入してきた。

「おい、壁は？」

「んー？ 無いね」

高町なのは得意技、壁抜き。

そうか、壊したか。そうか……。

「ポスターで誤魔化しておいたから大丈夫なの」

「そういう問題じやないとと思つ……」

それでも可愛らしい彼女に甘いと自分でも思つ。

「バレなければ問題はないの」

言い切つた。

それに対して俺の言葉を待たずには、

「んっ」

唇を合わせられた。

攻防としては女の方が攻撃的であった。

唇から舌を這わせて下に移動する。

その筋道を開ける様に手は服を脱がしていった。

とりわけ、口と手で男の物を攻めるのが巧くなっていた。

男のほうは直立のまま相手の成すまことに受け入れた。

膝立ちで奉仕する姿を見るのはやはり男としての情欲を満たすものがある。

それでもやはり、互いに気持ち良くなりたい、させたいと思うのが男女の言葉のない意思疎通であった。男は前かがみになつて臀部から手を滑らせて秘所を弄ぶ。

負けず劣らずで互いに果てるまで互いにせめぎ合つ。

そして、互いに準備が整い繋がるのだ。

高町なのはの人生最大のミスであった。

壁抜きをして風通しを良くしたまでは良かったのだが、朝方にミウラ・ケイタの部屋の扉から外に出て自分の部屋に戻ってしまったのだ。
うつかりミスであった。

それがあろうことが偶然にも早朝訓練の申し込みに訪れていたスバル・ナカジマに発見されてしまったのであつた。

「スバル、お願いだから内緒ね？」

「ええ、もちろん、なのはさんがミウラさんとそういう関係だとか思つてませんよ。ええ、タベはお楽しみだとか、恋人だつたとか、スキヤンダルだとか思つてませんとも」

スバル・ナカジマの内情は、憧れの二人の秘密を握れたという喜びに満ちていた。

だからこそ、お願いするのだ。

「うう、どうすれば黙ってくれるのかな？」

「私の願いは、サンドイッチですね」

そう、比喩する。

つまりは、

「3Pでお願いします」

満面の笑みで言い放つた。

偶然と必然。
幸運と悲運。

絡まる糸から逃れられない。

配点：（主人公）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7866z/>

なのは一途のはずがどうしてこうなった？

2012年1月7日01時17分発行